

主 題：神の選択

聖書箇所：ヨハネの福音書 18章1－11節

今日私たちはイエス・キリストの復活をお祝いします。もちろん、毎週日曜日、私たちはイエス・キリストの復活を記念して集り、復活の主を崇めるわけですが、特に、今日復活祭の日、私たちはこの復活の主を心から崇めるわけです。

◎ゲッセマネの園での出来事

イエスが私たちの罪のために十字架に架かり、そして、三日後によみがえってくださった、それが私たちの信仰であり、私たち人類に与えられた神からの救いであり希望です。この出来事の中で、特に今日この時間、私たちはイエスがゲッセマネの園において捕らえられたときの様子に注目して、みことばをご一緒に見て行きたいと思います。ヨハネの福音書18：1－11のみことばを読みます。

18:1 イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、ケデロン川の筋の向こう側に出て行かれた。そこに園があって、イエスは弟子たちといっしょに、そこにはいられた。:2 ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。:3 そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。:4 イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、『だれを捜すのか。』と彼らに言われた。:5 彼らは、『ナザレ人イエスを。』と答えた。イエスは彼らに『それはわたしです。』と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。:6 イエスが彼らに、『それはわたしです。』と言われたとき、彼らはあどざりし、そして地に倒れた。:7 そこで、イエスがもう一度、『だれを捜すのか。』と問われると、彼らは『ナザレ人イエスを。』と言った。:8 イエスは答えられた。『それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。』:9 それは、『あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした。』とイエスが言われたことばが実現するためであった。:10 シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。:11 そこで、イエスはペテロに言われた。『剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。』

どのような状況であったのかをまず頭に描いてください。イエス・キリストは愛する弟子たちと最後の晩餐をお持ちになりました。2階座敷で最後の夕食を摂られた後、そこで賛美をし、その後、イエスは弟子たちを伴って、エルサレムの東側にあるオリーブ山の、園があったとみことばが教えているように、ゲッセマネの園へ向かって出かけて行くのです。食事が終わった後、彼らはイエス・キリストの祈りを聞き、賛美の歌を歌いました。恐らく詩篇113篇から118篇までの歌を歌い、最後に136篇の賛美をした後で彼らはオリーブ山へ向かって行くのです。そして、ゲッセマネの園に着いたイエス・キリストはそこで祈られ、その後、兵士たちによって捕らえられ、その後さばかれ、十字架へと架けられて行くわけです。この出来事が今読んだヨハネの福音書18章の後のところに出て来るのです。この出来事を私たちは今から見て行きますが、この出来事も私たちにどれほど神があなたのことを愛しておられるのかを教え続けてくれるのです。すべてのものをお造りになった創造主なるまことの神はあなたのことを愛してくださっている、どのような愛であなたが愛されているのか、このみことばは私たちにそのことを繰り返し繰り返し教えてくれます。イエス・キリストはこの出来事を通して、ご自分がまことの神であるということを示されました。イエス・キリストだけがまことの神であるということ、様々な出来事を通してイエスは人々に教え続けられました。なぜ、そのようなことをされたのでしょうか？今お話ししたように、イエスは一人でも多くの罪人が悔い改めてこの救いに与るようにと願って、救いの御手を差し伸べ続けておられたのです。

特に、このみことばを見る時に、私たちは三つのことによってイエスをご自分が神であると明らかに示されたことに気づきます。

☆イエスをご自分が神であることを何によって明らかにされたのか

1. ご自分の知恵と御力によって

一つ目は、イエス・キリストご自身の知恵と御力によってそのことを明らかにされました。4節に「**イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、**」と記されています。この出来事すべて、イエスの周りに起こったこと、イエスが知らなかったことは何一つないというのです。この後、自分が縛られ、十字架に架けられて殺されて行くこと、そのすべてをイエスにご存じだったのです。そのすべてのことを知っておられたイエスは、これから自分に起こることを思って、恐れを持たれたのでしょうか？みことばはそのようには教えていません。却ってその逆でした。なぜなら、4節のところ

イエス・キリストは「自分の身に起ころうとするすべてのことを知って」、その後、「出て来て、『だれを捜すのか。』と彼らに言われた。」とあります。イエス・キリストを捕らえに来た群集に対してイエスがなされたことは、彼らのところにわざわざ自分から出て行ったというのです。そして、彼らが捜しているのは自分である、わたしがそのイエスであるということを自分から明らかにされて行かれるのです。3節のみことばを見ると、イエスを捕らえにやって来た群集がどういう構成であったのかが記されています。「一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たち」、ユダが彼らを率いてイエスのいるゲッセマネの園にやって来たのです。この「一隊の兵士」と記されている「一隊」ということばは「レギオン」ということばの十分の一という意味です。「レギオン」は6,000です。ですから、皆さんの聖書の欄外にも小さな字で「ローマの軍隊の一単位で通常600人」と説明が加えられています。6,000の十分の一だから600です。普通は「一隊の兵士」という場合、600人の兵士を指したのです。600人がイエス・キリストを捕らえに来たのでしょうか？そうとは思えません。しかし、少なくともかなりの兵士たちがそこにいたということは私たちは伺い知ることができます。また同時に、「祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たち」とありますが、ルカの福音書22:52には「祭司長、宮の守衛長、長老たち」と記されています。ですから恐らく、祭司長やパリサイ人から遣わされた宮の警備をする人々、つまり、祭司長たちが自由になったのは彼らだけですが、一 数百人いたとも言われるのですが、そういう人々をユダが連れてイエスの元にやって来たのです。はっきりした人数は分かりませんが、かなりの数の人々がユダに率いられてこのゲッセマネの園にやって来たことを私たちは想像することができます。

そして、イエスはその群集たちの前にご自身で立って、彼らに「だれを捜すのか」と質問をされるのです。その時に彼らは5節にあるとおり「ナザレ人イエスを」と答えます。おもしろい答えでしょう？もし自分たちの前に立っている人物がイエスだと分かっていたらこんなことは言いません。「だれを捜すのか」と言って前に出た人物がイエスだと分かっていたら、普通は「あなたを捜しに来たのだ」と言うはずですが、ですから、ここでは自分たちの前に立っている人物がいったいだれなのかまだ分かっていないのです。だから、私たちが捜しに来たのは「ナザレ人イエス」と言ったのです。その時にイエスは「それはわたしです」とお答えになっています。そして、そのようにイエスがお答えになった後、この群集は「あとざさりし、そして地に倒れた」のです。非常に不思議なことが起こりました。この出来事を私たちはしばらく見て行きたいのです。非常に大切です。イエスのお答えは「それはわたしです」でした。実は、イエスがあえてこのようにお答えになったのは、イエスはこの答えを通してご自分がだれであるかを明らかにしたのです。これは実は、モーセが神の前で、人々がどの神があなたを遣わしたのかと問われた時に答えなければなりません、ですから、神さま、どうぞあなたのお名前を教えてくださいと、そのように出エジプト記3:13-14で問うています。「モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」:14 神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。」、名前を問うたモーセに対して主がお答えになったことは「わたしはある」、「わたしです」、つまり、この名前は神は自存されている方、神はだれの助けも必要としないということですが、私たちに助けが必要です。でも、神は永遠から永遠にだれの手を借りることも必要ない、神はご自分の力で生き、ご自分の力で存在している、だから、「わたしはある」と、だれの助けも必要としない存在だ、それがわたしの名だとモーセに告げたそのことをイエスはここで言われたのです。「わたしはある」——わたしはモーセに語ったあの神だ、わたしはすべてのものを造った創造主なる唯一まことの神なのだということを明らかにされたのです。そのことは、先ほどから見ている群集たちに起こった出来事が明らかにしています。彼らはそのことばを聞いた時に「あとざさりし、そして地に倒れた」とありました。つまり、イエス・キリストのおことばにはこのような力があつたのです。

思い出してください。イエスがこの地上におられた時、イエスはおことばをもって様々な奇蹟のみわざを為しておられます。例えば、人の病を癒す時もそうでした。百人隊長のしもべが病気でした。彼はこのように言いました。「主よ。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばをいただくさせてください。そうすれば、私のしもべは直りますから。」と、イエスは「あなたの信じたとおりになるように。」と言われました。そして、しもべは癒されました(マタイ8:8-13)。ラザロが亡くなって4日目でした。遺体はもうすでに腐敗し始めていたことでしょう。その時にイエスは「ラザロよ。出て来なさい。」と言われました。ラザロは敢然とその死からよみがえって出て来ました(ヨハネ11:43)。イエスがそこに行って何かをして看病して良くなったのではないのです。イエスはただ「出て来なさい」と言われたのです。ガリラヤ湖で嵐に遭遇した時に、恐れていた弟子たちの前でイエスは「黙れ、静まれ。」と言われました。すると嵐は静まりました(マルコ4:39)。イエスが言われたとき自然界

もその声に従ったのです。悪霊たちもそうでした。イエスが命ずるなら、悪霊たちは反抗することなく、イエスが命じたようにその人から出て行きました。イエスは命じられたのです。その命じたようにすべてのことがなりました。神がこの世界をお造りになった時も実はそうでした。詩篇33：6に「**主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。**」と記されています。思い出してください。創世記の最初に何が語られているでしょう？「**初めに、神が天と地を創造した。**」と神がこの地上のすべてのものをお造りになったのです。「**光よ。あれ。**」と仰せられたら光ができたのみことばが教えます。この大空にしても、地上と海にしても、植物にしても、太陽と月にしても、魚や地上の動物や鳥にしても、このすべてのものは神がそのようになれと言われたら、そのようになったのです。この出来事は何を言っているのでしょうか。神には力があるということです。神のおことばが発せられるとその通りになるのです。

イエスがここで「**それはわたしです。**」と言われた時に、鍛えられた最強のローマの兵隊たちは倒れるのです。どんな兵士であろうと、この神の前に立ちおおせることはできなかつたのです。この方が言われると彼らは何もすることができなかつたのです。イエスはここでご自分がだれであるか、「**それはわたしです。**」、「**わたしなのだ**」というその神の名前を使うことによって、また、このようにおことばを発することによって、この群集が倒れたように、このようなわざをもって、ご自分が神であることを明らかにされたのです。イエスはご自分の知恵と御力によって神であることを明らかにされました。でも、悲しいことは、このようにして神が真理を教えてくれたにもかかわらず、群集はそれを見ていながらそれを信じようとしなかつたのです。受難日の朝、子どもたちと話をしている時に、イエスが十字架にお架かりになった時に群集はそれを見て「十字架から降りて来い、そうしたら信じてやるから」と言いましたが、「こんなことってあると思う？」と聞くと、彼らは「ない」と答えました。人間はどのような奇蹟のみわざを見ても信じません。信じるということは非常に難しいことです。神が働いてくださらなければ…。だからといって、人間の責任がないわけではありません。私たちは神によって真理が示されて、その真理に対して選択をするという責任が与えられます。しかし、神が働いた時に人はこの救いへと導かれます。悲しいことは、彼らはこのような神の奇蹟を見ていながら、それでもなお心を開こうとしなかつたということです。

2. ご自分の愛によって

二つ目は、ご自身の愛によってイエスはご自身が神であることを明らかにされました。今見て来たように、イエスは自分を捕まえようとやって来た人々に対して、まだ救いのチャンスを与えているのです。彼らを滅ぼすこともできたのです。わたしを捕まえに来たのか、何という不屈き者だと、その場で滅ぼすこともできました。でもイエスはそうならず、彼らにご自分がだれであることを示して、まだ救いのチャンスを与えておられるのです。このような神だからあなたも私も救われたのです。私たちは生まれながらに神の前に罪に罪を重ねて来ました。ある人はある年齢になって教会にお見えになりました。そして、イエスを信じた時に気づくのです。これまで私は長い人生、神に逆らい続けて来た、しかし、今こうして私は神の恵みによって救われた、何という感謝なのか、こんなに神に逆らって来たにもかかわらず、神は私をこのように憐れんでくださって、こんなすばらしい救いをくださったと、そのように神に感謝しておられる方はたくさんおられると思います。ある人は、クリスチャンの家庭に育って、ずっとみことばを聞いていたかもしれません。でも、みことばを聞いても聞いても心を閉ざしていた、でも、ある時に心を開いて、心からイエスを信じた、こんなにみことばを聞いていながら、神に対して心を開いていなかった私を神は憐れんで、このように救いへと招いてくださった、そのような人もたくさんおられると思います。いずれにしろ、神がこのように憐れみ深いお方であり、こんな罪深い私たちに恵みを与え続けてくださっている、そういう方だから、今こうして私たちは救いを感謝し喜ぶことができるのです。憐れみ深い神であって本当に感謝です。神が私たちのような存在でなかつたことを感謝しなければなりません。神は憐れみと愛に満ち溢れたお方です。

罪人に対する神の愛というのはもう繰り返し示されています。その神ご自身の愛は罪人にだけではありませんでした。イエスを愛する者、また神が愛する者にもその愛が示されています。8節に「**イエスは答えられた。『それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。』**」とあります。イエスはそこにいた11人の弟子たちのこと言っているのです。イエスは「あなたたちはわたしを捕まえに来たのでしょうか？それなら、この11人の弟子たちは逃してあげなさい、彼らを自由にしてあげなさい」と言われたのです。イエスは最後の最後まで、自分のことよりも人々のことを心にかけておられるのです。彼らのことを心に留めて、彼らのことを心配しておられるのです。このような神なのです。その神によって私たちも愛され続けているし、そして、その神によって私たちは守られ続けているのです。「**良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。**」とヨハネの福音書10章で繰り返しそのことが教えられています。すばらしい羊飼いとというのは、喜んで自分の羊のため

にいのちを捨てる、すばらしい羊飼いとというのは自分の身よりも保身を考えるよりも、その羊のために喜んで自分を犠牲にする人たちだと言うのです。イエス・キリストは私たちのためにいのちを捨てただけではない、あなたをいのちがけで守ってくれているのです。10：11に「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」、15節には「それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っていると同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」、28節「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」、29節にも「わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません」とあります。ヘブル人への手紙の中で「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」(13：5)と言われました。全能なる神の御手によって私たちは守られているのです。私たちの罪深さをご存じである神、私たちの愚かさをご存じである神、その神はそんな私たちを救ってくださり、そして、その力強い全能の御手をもって私たちを守り続けてくださっているのです。詩篇145：20に「すべて主を愛する者は主が守られる。しかし、悪者はすべて滅ぼされる。」とあります。クリスチャンは恵まれています。救われた私たちは本当に恵まれています。罪を赦してただけでなく、天国を約束してただけでなく、この地上にあって、神はこうして御力をもって守り続けてくださっているのです。確かに、私たちにはすばらしい天国が約束されています。でも、今私たちは天国民とされたことを喜びながら、天国民として生きて行くことができるのです。何という祝福を神は私たちに備えてくれたのでしょうか、何という祝福をもって神は私たちをこの恵みに招いてくださったのでしょうか。主イエス・キリストはご自身の愛によって、ご自分が神であるということをご自身にしてくださいました。

3. ご自身の歩みによって

そして三つ目、ご自身の歩みによってご自分が神であることを明らかにされています。ご自身の知恵と御力だけではない、ご自身の愛だけではない、ご自身の歩みがイエスがだれであるかを明らかにしました。イエスは常に父なる神のみこころに忠実でした。どんなときでも、イエスはすべての点で父なる神のみこころに従って行かれました。なぜ、イエス・キリストはこのゲッセマネに行かれたのか考えてみてください。今見て来たように、イエス・キリストはこれから自分の身に何が起こるのかを知っておられたのです。これから自分が捕らえられて十字架に架けられることを知っているのです。でも、なぜイエスは敢えて、そのすべてを知った上でゲッセマネに行かれたのかです。先ほどの2節のみことばを見ると「イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。」と書かれています。つまり、イエスはゲッセマネに行けば、必ず、そこにユダがやって来て自分が捕らえられることを知っているのです。それを知っていながらイエスは敢えてゲッセマネへと行かれたのです。その一つの理由は、私たちがみことばで教えられたように、祈りのためでした。イエスはこのオリーブ山のゲッセマネに行かれた後、何を為されたのか、11名の弟子を連れて行かれたのですが、8人を残して3人だけを連れてもう少し離れたところに行って、そこに3人を残して、さらに、もう少し離れたところに行ってイエスは一人でお祈りになった、その様子が福音書の中に記されています。この過越の間、恐らくイエスは、このオリーブ山に戻ってゲッセマネで祈り続けておられたのでしょうか。というのは、ルカの福音書21：37に「さてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリーブという山で過ごされた。」と記されています。昼間はエルサレムの城壁の中に入ってその宮の中で教えて、夜になるといつもこのオリーブ山に行かれたのです。恐らく、オリーブ山で野宿なさっていたのでしょうか。しかし同時に、このオリーブ山のこの園にあって、イエスは父なる神との親しい交わりを持っておられたのです。同じルカの福音書の22：39にも「そこからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。」と書いてあります。ですから、今回だけイエスはオリーブ山を選んだのではないのです。機会があるといつもそこに出て、そこで神とのそのような交わりを持っていたのです。ですから、イエスはいつものように夜は祈るためにゲッセマネに行かれたのです。

もう一つ言えることは、イエス・キリストは捕らえられるためにここに出て行ったのです。先ほども話した通り、イエスはこれから起こることを全部知っておられました。その上で敢えて、そのすべてのことが確実に起こるようにここに出て行かれたのです。この過越の祭りの時には、地方から多くのユダヤ人たちがエルサレムに集って来るのです。この祭りの1週間、ユダヤ人はすべてエルサレム市内に留まることになっているのです。ですから、この当時、エルサレムの城壁の中のすべての宿は満室だったでしょう。その祭りを祝うためにたくさんのユダヤ人が集って来たのですから。エルサレムがあふれていたから、当時、オリーブ山の東側にあるベタニヤという村に泊まることもエルサレムに泊まったのと同じように認められていたのです。但し、過越の食事だけはエルサレムの市内で守らなければならなかった、だから、イエスたちは最後の晩餐を城壁の中で守っています。今話したように、たくさんのユダヤ人たちがエルサレムに集っていました。このユダヤ人たちの中に過激派がいるわけです。彼らは何

とかローマをこのパレスチナから追い出したいと夢見ていました。そして、彼らは何とか力づくでもこの勝利を勝ち取りたいと願っていたのです。そのためであれば、いかなる暴動もいとわないと考えていた者たちでした。ですから、もしエルサレムの市内で暴動が起これば、それに乗じて彼らは大きな問題を起こすことは可能でした。もちろん、ローマもそのことを知っているのです。そういう人々が存在すること、彼らがそういう機会をねらっていることを知っていたのです。ですから、こういう祭りの時期になると、そのことを警戒して、多くのローマ兵を神殿の北西にあるアントニヤの城塞に集めていたのです。現在でもエルサレムに行くとその場所が残っています。そして、もし町の中で何か暴動が起こればすぐに鎮圧できるようにと待機していたのです。そのような時に、今私たちが学んでいる出来事が起こっているのです。ですから、もしイエスがエルサレムの町の中で捕らえられたら、それに乗じて過激派が暴動へと発展する可能性がありました。だから、イエスはエルサレムの市内を避けたのです。そういう人々のいない、このゲッセマネの園を選ばれたのです。

18：11を見ると「そこで、イエスはペテロに言われた。『剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。』」とあります。イエスの関心はただ一つでした。どんな時にも父なる神のみこころを行うことでした。どんな時にも父なる神のご計画に従って生き続けて行こうとされたし、彼はそのように生きたのです。イエスがこの11節で言われた「杯」というのは、旧約聖書においてはさばきと関連して用いられています。さばきです。エレミヤ25：15に「まことにイスラエルの神、主は、私にこう仰せられた。「この憤りのぶどう酒の杯をわたしの手から取り、わたしがあなたを遣わすすべての国々に、これを飲ませよ。」とあります。神が人々の罪に対して怒っておられるということです。神はその人々の罪をさばくと言っているのです。そのことを頭に入れながら、もう一度この11節を見ると「父がわたしにくださった杯、神の怒りを、神のさばきを」ということです。では、イエス・キリストが何か怒りに触れるようなことをしたのでしょうか？イエス・キリストが神のさばきを受けなければならないようなことをなされたのでしょうか？いいえ、みことばには「罪は犯されませんでした」（ヘブル4：15）と教えています。全く罪を犯すことがなかった、では、何のことでしょう？ローマ人への手紙5章の中でパウロは「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」（5：9）と教えてくれます。「彼によって」、つまり、イエス・キリストによって「神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」、つまり、今私たちが見ているヨハネの福音書の18：11のみことば、そして、今読んだローマ5：9のみことばを見ると、みことばが何を教えようとしているのか明らかです。イエスはご自分が何か罪を犯して、それゆえに、この杯を、この怒りを、このさばきを受けなければならない運命になったのでしょうか？そうではないのです。このイエス・キリストの死はあなたの身代わりだったのです。このさばきを受けなければならないのは、あなたであり、私だったのです。罪を犯したのは私たちです。罪を犯したのはあなたです。神がお怒りになっているのはあなたの罪に対してです。神がさばきを約束されたのはあなたの罪に対してです。あなたが飲まなければならないその杯をイエスが代わって十字架で飲んでくれたのです。

イザヤ書53章で、キリストが生まれる約700年前に、キリストの死についての預言がされています。3節から「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。：4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。：5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」、4節に「病を負い、私たちの痛みをになった」とありますが、この「病」というのは肉体的な病気ではなく心の病、罪のことです。「痛みをになった」というのは、その罪がもたらす苦しみです。私たちは罪を犯したゆえにいつも心が悩んでいます。私たちはその罪の罪悪感に責められ続けています。イエスはそのすべてを私たちに代わって負ってくださったというのです。この53章の5節、8節、12節に「そむきの罪」ということばが繰り返されています。そして、5、6、11節を見ると、「咎」が出てきます。9節には「悪者」と出てきます。12節には「罪」と出てきます。イエス・キリストの死はイエス・キリストの罪ゆえではない、イエスが背いたから、イエスの咎のゆえに、イエスが悪いことをしたから、イエスが罪を犯したから、だから、このような目に遭ったのか？みことばがはっきり教えます、「違う」と。神に背いたのはあなたです。あなたの咎がさばかれるのです。あなたが神の前に悪者となったのです。そして、あなたの罪が神によってさばかれると警告されているのです。イエス・キリストはあなたの罪の病を負って、その罪の結果をになわれ、そして、あなたの代わりにすべての杯を飲み干してくださったのです。イエス・キリストの十字架というのは、本来ならあなたが受けなければならない神からのさばきを、怒りを、彼が身代わりに代わってくれたということです。このようにしてまで、神はあなたに救いを与えようとあなたに愛を示してくださっているのです。驚くべきことは、このことをイエスは自ら進んでしてくださったということです。これが神の選択だったというので

す。イエスはしぶしぶ仕方がないと言われたのではない、イエスは自ら進んで、群集の前に出て行きました。自ら進んで捕らえられるように自分の身を任せました。自ら進んで十字架に架られました。そして、自ら進んでご自分のいのちを父なる神の前にゆだねられました。イエスは自分からいのちを捨てられたのであって、イエスのいのちは奪われたのではないのです。奪われるというのは自分の意志に反することです。イエスがあなたの身代わりとなって死んでくれたというのは、イエスご自身の意志だったからです。イエスご自身の選択だったのです。そのようにイエスは決心し、そのようにイエスはなされたのです。あなたの罪を赦すために、あなたの身代わりにイエスは十字架で死んでくれたのです。**「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。」**と、ヨハネ10：18の前半でイエスは言われました。ペテロはもう少し私たちによく分かるようにこのように言っています。Iペテロ2：24**「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。」**。創造主なる神が、宇宙のすべてのものをお造りになった神が、あなたを造った神が、その神に逆らい続けているあなたのために、自らのいのちを犠牲にしようとして決心してくださった、そのように決めてくださり、そして、ご自分のいのちを十字架で捨ててくださったと言うのです。考えられますか？このような愛でもってあなたは愛されているのです。

だから、イエスはこのゲッセマネの園で、隠れることもできたし、そこから逃れることもできました。これまでイエス・キリストを捕らえたいと人々は思いました。でも、その度にイエス・キリストは「まだその時が来ていなかった」ということで捕らえられることはありませんでした。ヨハネ8：20**「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕えなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。」**、59節**「すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。」**、また、ヨハネ10：39にも**「そこで、彼らはまたイエスを捕えようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。」**とあります。ですから、イエスは確かにそのような手から逃れたのです。今回もそのことができたのです。自分を捕らえに来るということを知っておられたのですから、そこから逃れることができたのです。しかし、イエスはそれをなさらなかったのです。イエスはこの敵を滅ぼすこともできたのです。自分を捕らえに来るこの者たちを一瞬のうちに滅ぼすことができたのです。マタイの福音書の26：53で非常に興味深いことをイエスは言われています。今私たちが見て来たところです。ペテロが刀を持ってマルコスの耳を切り落としました。その時イエスはペテロに**「剣をもとに納めなさい。」**と言って、そのマルコスの耳を癒してあげます。その時にイエスは**「それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。」**(マタイ26：53)と言われました。もし、わたしが望めば、この瞬間に十二軍団、一軍団は6,000人です、6,000×12、72,000人の天使たちを呼んでこの者たちを一瞬のうちに滅ぼすことができるのだと言われたのです。イエスがそれを望めばできたのです。すべての敵を滅ぼそうとしたら、イエスは一瞬のうちに滅ぼすことができたのです。しかし、イエスはそうなさらないのです。マタイ26：54にこう続きます。**「だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」**と。そのようなことは簡単だ、わたしに逆らい続けている者たちを一瞬のうちに滅ぼすことはできる、でも、そのために私は来たのではない、それが父なる神のみこころではないと言います。何がみこころなのでしょう？罪を犯している罪人のそのさばきを自分が代わって受けること、あなたの罪の身代わりとなって十字架で死ぬこと、それがわたしがこの世に来た目的であり、父なる神のみこころなのだと言うのです。

先ほど見たIペテロ2：24の後半は**「それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」**と続いています。このイエス・キリストの十字架によって、イエス・キリストを信じるすべての人の罪が完全に永遠に解決されたのです。赦されるのです。これがこの聖書が教える偉大な神です。これが救い主が人々のために、あなたのためになしてくださったみわざです。いつまでも、どこまでも、父なる神のみこころに従い続けたお方、こんな人はほかにはいません。この忠実な歩みは私たちにこの方がまことの救い主であることを明らかにしています。にもかかわらず、人々はどのように彼を見て、彼を扱ったのでしょうか。もう一度ヨハネ18章に戻って、兵士と神殿の警備をしていた者たちがイエスを捕らえるために出て来ました。彼らはその手にともしびとたいまつを持っていました。なぜ、そのようなものを持っていたのでしょうか？歴史家が明らかにするのは、この時期は満月で、非常に夜も明るかったと言います。私たちも、イースターを迎える数日前、満月を楽しみました。非常に明るいのです。普通ならたいまつなどは必要としません。それなのに、なぜ彼らはそのようなものを持って来たのでしょうか。それは、彼らがこのイエス・キリストがもしかするとほかの犯罪人と同じように、どこかに隠れている可能性があると思っていたからです。夜だから、隠れていたら明かりが要る、イエスはきっとどこかに隠れているに違いないと、彼らはそのように思ったのです。彼らはまた同じように、武器を持ってそこに来たとあります。ローマの兵隊たちは戦闘で使う大

きな剣を持っていたのではありません。このような出来事ではそれは邪魔になります。小刀、短剣を身につけてやって来たのです。そして、この警備に当たっていた者たちはこん棒を持ってやって来たのです。なぜでしょう？彼らはイエス・キリストがもしかすると抵抗するかもしれない、彼の弟子たちも同じように抵抗するかもしれないから、このような武器が必要だと思ったのです。愚かでしょう？イエス・キリストは逃げなかったし、イエス・キリストは抵抗もしなかった、却って、イエスは自分からいのちを捨てて行かれたのです。なぜなら、そのためにイエスは来られたからです。あなたを罪から救うためには、あなたの罰をだれかが受けなければいけなかった、イエスがそれを受けてくれたのです。

◎ユダについて——彼の間違い

最後に、このユダという一人の弟子のことを私たちは忘れることができません。なぜなら、この時にもユダがいたからです。ユダがこの群集を先導してやって来ました。ユダはイエスの弟子で、十二使徒の一人でした。しかし、彼は自分の永遠を地獄で苦しみながら過ごします。彼の間違いは、

1) イエスを拒んだこと

なぜなら、彼はこの主イエス・キリストを見てはいました、聞いてはいました、知ってはいました、でも、信じてはいなかったのです。そして、彼は最後にこの主イエス・キリストを裏切るのです。彼を銀貨30枚で売ってしまうのです。なぜ、彼はこんなことをしたのでしょうか。3年以上の間イエス・キリストとともにいて、イエスのことを見ていた、知っていたはずなのに、なぜ、彼は最後の最後にイエス・キリストを拒むのでしょうか。言えることは、彼はこのような救い主を待っていなかったのです。ユダが待望していた救い主はこんな救い主ではなかったのです。罪からの救いではなくて、このローマからの救いであり、自分の持っている問題からの救いだったのです。実は、そういう人々は今の時代にもたくさんいます。イエス・キリストがあなたの罪の身代わりとなって十字架で死んで、約束どおり三日後によみがえってくださった、それが証拠に、それから約2000年たった今でも世界中でこのように復活祭が祝われています。キリストの復活は人生を変えるし、歴史を変えたのです。こうして神が救いを備えてくれたと言っているにもかかわらず、多くの人々はその話を聞いて、私は信じません、なぜならそのような方法で罪が赦されるなんて信じられないと言うのです。だれが救い主なのでしょう。自分の考える救いの道ではないから、救いの方法ではないから受け入れようとしないのです。あなたはそんな人ではありませんか？イエスを信じるだけで救われるなんておかしいと思う人がいます。あなたがおかしいと思われようと、神が私たちに与えてくださった救いの道はこの「信仰による救い」だけです。イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われる、これが神が私たちに与えてくださった唯一の救いの道です。

多くの人々は罪からの救いを求めています。それ以外のものを求めているのです。ある人は直面している問題からの解放を求めているかもしれない。ある人は抱えている悩みからの解放者を求めているかもしれない。病からの、困窮からの、家庭の問題からの、夫婦の問題からの、金銭的な問題、そのような問題からの救い主を。あなたもこのユダと同じように、イエスの話を聞いてはいても、その救い主を拒み続けていませんか？このユダの誤り、主イエスを拒んだだけではありません。

2) 見せかけだけの信仰者

彼の問題は、彼の信仰—あえてそう言いますが、それはただの見せかけだけのものでした。このヨハネの福音書の中にはそのことが記されていませんが、ほかの福音書を見た時に、ユダは祭司長たちとの間である取り決めをしていました。「私が口づけをする相手がイエスだ」と。そして、イエス・キリストのもとにやって来るのです。そして、マタイ26章やマルコ14章を見ても、そこで使われている、実際にユダがイエスに口づけをした時のそのことばというのは、「繰り返し口づけをした」ということです。1回だけではなかったのです。ユダは繰り返しイエスに口づけをしたのです。

この当時、口づけというのは愛情の証でした。家族はそうにして自分たちの愛情を表わしたのです。ユダは神の家族の一員ではありませんでした。イエスに属していなかった、でも、そのような形だけの行為を行なったのです。また、弟子たちは自分たちの教師たちに対して、あいさつをする時には口づけをしたのです。その口づけは献身と従順の証でした。ユダは本当の弟子でなかったのに、イエス・キリストに口づけをするのです。つまり、彼は見せかけだけの信仰者だったのです。ユダの中には、イエスに対する愛も、イエスに従順に従って行きたいといった思いもありませんでした。ただ、彼はあたかも自分がそういうものを持っているかのように見事に振る舞ったのです。彼の口づけの目的はただ一つでした。イエスを愛するからでもない、イエスに従って行くという証でもない、捕まえる人物がだれかを明らかにするため、ただそれだけです。だから、間違わないように何度も何度も口づけしたのです。

こういう人々がもしかするとこの中にもいるかもしれません。みことばを聞いてはいても、バプテスマを受けてはいても、奉仕をしてはいても、心が主につながっていない人、見た目は信仰者のようであるかもしれない、見た目は非常に霊的であるかもしれない、でも、心は神から離れているのです。もし、

あなたがそういう人であれば悔い改めなさい、神は赦してくださいます。でも、そのままの歩みをし続けるなら、神のさばきがあります。見せかけだけの信仰、キリストをだますことができるユダは思ったのでしょ、でも、イエスは知っておられました。神をだますことはできません。

今日、私たちは、イエスが捕らえられたところを見てきました。確かに、イエスはご自分が神であることを明らかに人々の前に示し続けておられました。でも、それを信じた人々もいるけれども、信じなかった人々もいます。あなたはどちらでしょうか？イエス・キリストは死からよみがえって来るとい、この復活によって、ご自分が間違いなく神であること、唯一の救い主であることを明らかにしてくれました。あなたの希望はこのイエスだけです。なぜなら、ほかにあなたの罪の身代わりとなって死んでくださり、そして、その死から約束どおりよみがえってきた救い主は存在しないからです。イエスをあなたの救い主として、あなたの主としてお受けになっていますか？あなたの罪は完全に赦されていますか？あなたはこの神の子どもとして歩んでおられますか？ここにおられるすべての方が、このキリストによって与えられるこのすばらしい救いをご自分のものとされて、その救い主を心から喜び、心から感謝している、そのような者であることを願います。もし、そうでなければ、今日がその日となることを心から願います。